

デスマーチからはじまる現代狂想曲―目覚め―

鈴木です。社会的弱者を守るために作られた規則が、より一層、社会的弱者を苦しめる結果になる事がままあります。なんていうか皮肉な話ですよね。」

「……いつもの天井だ」

まあ、見えてるのは天井じゃなくて机の引き出しだけどさ。

オレは寝ぼけ眼を擦りつつ、寝袋のファスナーを開けて机の下から這い出す。

「寝袋だと身体がバキバキだ」

オレは肩を回しつつ、愚痴をこぼす。

「布団が恋しいよ……」

会社に入社した当時は泊まり込みを伴う超繁忙期に、会社がレンタル布団を借りてくれたのだが、いつ頃からか、お役所のお達しで泊まり込み前提の布団なんかを会社が用意する事が禁止されてしまったのだ。

まあ、会社が納期を延ばしてくれないのが原因——だけでもないんだよね。

納期が延びれば延びるだけ、開発者って人種はクオリティーアップに走って納期を食い潰す^{サガ}性を持っているのだ。

その証拠に——周りには同僚達の死屍累々たる寝姿。

デスマーチ中だと見慣れた光景だけど、なかなかブラックだ。

オレは一つ溜め息を吐いて、時計代わりのガラケーを開く。

最近では絶滅危惧種となった二つ折りの骨董品だ。

「まだ、こんな時間か——」

オレは独り言を呟いて立ち上がった。

始業時間までまだまだ時間があるので、コンビニに朝飯でも買いに行こう。

オフィスの扉が開いて、生真面目そうな女性が入ってきた。

「おはよう、山田さん」

「おはようございますデス、鈴木さん」

彼女はオレの顔も見ずに挨拶すると、そそくさとタイムカードを押して総務のあるブースへと向かう。

微妙に傷つきそうになるが、彼女は誰に対してもあんな感じなので気にしたら負けだ。

「ちょっとコンビニに行ってくる」

「行つてらっしゃいデス」

一応、受け答えはしてくれんだよね。

語尾がいつもと違うのは、新しいアニメに嵌まった影響だろう。

昼休みにでもお薦め度合いを聞いてみようかな？

オレはそんな事を考えながら、近所のコンビニに向かう。

そういえば、泊まり込み続きの割に、妙に頭がすっきりしている。

一見快調だが、こういう状態は実はわりとやばい兆候だ。

アウトの状態になる崖っぷちの時になりやすい。

『●●●』

そんな事を考えていると、外国語っぽい可愛い声が耳に届いた。

『良い匂い〜?』

『お肉の香りなのです』

外国人ばい幼女二人がコンビニ前の牛丼屋のガラスに張り付いている。

白髪の子は猫耳カチューシャに猫尻尾を装備し、茶髪の子は垂れた犬耳カチューシャに犬尻尾を装備していた。彼女達の親は凝り性らしく、コスプレの尻尾が本物みたいに動いている。

『こんな時間に不用心だな——』

周囲を見回すが、親の姿は見えない。

声を掛けようか迷っていると、通りの向こうに警邏中の警察官が見えた。

『警察の人に任せておけばいいや』

オレは余計なお世話を中断してコンビニへと踵を返す。

『知らない人〜?』

『捕まったらダメなのです』

そんな声に顔を向けると、ダッシュで逃げていく二人のコスプレ幼女達の姿と、困った顔の警察官が二人を追いかける姿があった。

「鬼ごっこのつもりなのかな？」

そんな感想を呟いたオレの鼻に、ふわりと花の香りが届いた。

顔を戻すと、青髪ロングの幼女がオレを見上げていた。

今日は幼女に縁のある日だ。

「おはよう、イチロー」

「ああ、おはよう」

オレの知り合いの子供に、こんな目立つ子がいたっけな？

オレが首を傾げるのを見て、幼女が肩に掛かったオレのツインテを後ろにさばき、三日月のような笑みを浮かべた。

「本当の自分を取り戻したいなら、出会いを大切になさい」

「出会い？」

意味が分からず問い返すオレに、幼女は答えず、紅色のポニテを揺らして、コンピニを出ていった。

「——えっと？」

誰だったんだろうかと思ひ返してみたが、ついさっきの事なのに幼女の顔も特徴的だった髪の色も思い出せない。

若年性健忘症という言葉が脳裏を過つたが、頭を振り払ってその考えを捨てる。

きつとストレスと過労のせいだ。

うん、きつとそう。

オレは奇異な者を見る店員の視線から逃げるように、そそくさと品物を籠に入れ会計を済ませる。

「会社で食うのも味気ないし……」

オレは近くの公園に足を伸ばし、ハト達の視線に耐えながら朝食を口に運ぶ。

——出会いを大切になさい、か。

なぜか、その言葉だけは脳裏に焼き付いていた。



「●●●●? ●●●●●●」

朝食のゴミを片付けていると、なんとなく聞き覚えのある外国語が耳に届いた。

視線をそちらに向けると、青い瞳に金髪の地味系美少女が、アキバラしいファッションに身を固めた男達に囲まれている姿があった。

「ダメでござる。英語もフランス語も通じないでござる」

「ドイツ語とフィンランド語もダメだったーよ」

少女に絡んでいるのかと思つて歩み寄つてみたのだが、どうも彼らは迷子らしき少女を心配して声を掛けていたようだ。

通報しようとしていたお姉さんが、バツの悪そうな顔でスマホをハンドバッグに戻していた。

『——あ』

ふと、少女と目が合う。

不安そうな顔をしていた少女が、オレの事を見た途端、しおれていた花が咲くように笑みを浮かべた。

漫画だったら、「パアッ」という擬音文字オノマトペが浮かび、周りに点描や花が散りそうな感じだ。

『サトウーさん！』

まるで、異国の地で知り合いを見つけたかのような安堵した顔で、オレの方へと駆け寄ってくる。なんとというか、その様子が子犬みたいで可愛い。

「——え？」

少女がオレを抱きしめる。

なかなか、積極的だ。それに意外と背が高い。

高校の頃ならともかく、今は一七〇近くあるんだけど、彼女はオレと同じくらいの高さだ。

『良かった！ サトウーさんもいてくれて！』

オレに身体を預けていた少女が、オレを見つめてくる。

そういえば、さつきから彼女はオレの事をキャラ名で呼んでいた。

サトウーという名前はテストキャラやネットゲームなんかでよく使うキャラ名なので、何かのMMORPGのオフ会あたりで顔を合わせた相手だったのかもしれない。